

[事業報告]

TOEIC Bridge および Velc Test の成績

池田 容子

山陽小野田市立 山口東京理科大学 共通教育センター

TOEIC Bridge[®] and Velc Test Scores

IKEDA Yoko

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要 約

2019 年度は、プレイスメントテストとして利用している Velc Test に加え、学生達は TOEIC Bridge[®]も受験した。これら 2 種類のテストそれぞれにおいて、1 年生と 2 年生の全受験者が、同一のテスト問題に挑戦した。授業担当者が作成する期末考査問題とは異なり、上記のテストは、決められた学習範囲内で出題されるものではない。したがって、より客観的に学生の能力を測定できると考えられる。結果としては、低学年の成績が高学年のものより勝っていること、再履修生の成績と非再履修生の成績との差があまりにも大きいこと等、必ずしもこちらの望む通りのものばかりではなかった。

昨年度実施した調査では、定期考査のクラス平均点の序列が、Velc Test の結果をもとに分けたクラスの序列と見事に合致した。このことから、Velc Test は能力別にクラスを分けるのに有効に働いていると結論付けることができた。工学部と薬学部の 1 年生の成績比較は、昨年度の紀要に示した通りであるが、今回は、両学部の 1 年生と 2 年生の成績比較、そして工学部においては、学科別の成績比較も示すことができた。また、再履修生・非再履修生・留学生の成績比較も、併せて示した。留学生と彼らの属する学年の学生との成績の差、また、再履修生と非再履修生との成績の差は、それぞれ大きいことが分かった。感覚的には既に気付いていたことではあるが、実際に数値化した結果を眺めてみると、その差はあまりに大きい。

キーワード：得点差、留学生、再履修生、非再履修生

1. はじめに

1.1 プレイメントテスト実施と問題点

2018 年度より、工学部・薬学部ともに能力別クラス編成で、英語の必修 Reading 系の授業（1 年生及び 2 年生が対象）を実施している。プレイメントテストとして利用しているのは、金星堂が作成している Velc Test である。このテストはマークシート方式で、Listening Part と Reading Part から成り立つ 70 分間の試験である。これを年度初めと、各学期の終盤に実施している。年度初めの成績は、1 年生前期のクラス分け用資料として利用し、学期終盤にテストを実施して得られた結果は、次学期のクラス分け用に利用している。テスト結果は、教員がクラスを編成するための根拠資料として利用するのみにとどまらず、各学生が自身のレベルチェックのために用いることができる。各自の成績はインターネットで閲覧が可能であり、以前に受験したテスト結果と最新の結果を比較しつつ、自身の成績の推移や弱点をチェックすることができる。自分の実力を定期的に試し、その結果をチェックできるということは、学生にとって刺激となるはずであるし、モチベーションの維持につながると考えられる。

しかしながら、実施回を重ねるに従い、問題点も散見されるようになった。伝え聞くとところによると、上位クラスの学生が下位クラスで授業を受講したいがために、わざと間違った解答をすることにより、得点を調整しているケースがあるようである。学生個人が特定される可能性が大いに有り得るので、ここではこのタイプの学生の成績を根拠資料として示すことは避ける。しかしながら、確実に言えることは、前回実施分の成績と今回の成績の隔たりが、有り得ない程にあまりにも大き過ぎる事例があるということだ。歓迎するわけでは決してないが、自分の実力を得点調整に使用できるほど余裕があるということは、ある意味において感心できることなのかもしれない。ただし、実力を正確に示すデータを収集するという目的が損なわれるため、このような事例が増加するとなると、もはやテストを実施する意味がなくなってしまう。また、より好ましくないケースとして、受験自体をしない学生も実際にかなり存在した。試験実施の告知の際に予め、受験していない学生は最下位クラスに配属するという予告をしていることが災いしてか、このようなケースが生じた。

自身の実力とほぼ同等の力を有した学生達とクラス

を同じくすることで、自分に適した学習内容を提供してくれる授業を受講できる。実力に合っていないクラスで授業を受講するとなると、学生は満足のゆく成果が得られないことにつながると考えられる。より正確なデータをとるためにも、そして、学生自身の授業満足度を上げるためにも、学生達は必ずテストを受験し、尚且つ、答案を作成する際には、小細工を弄することなく、ありのままの実力を反映させるべきである。現在、Velc Test の結果はクラス編成用資料としてのみの利用に留まるが、今後は対象科目の成績に加味するという対策を講じるべきであると考えられる。

1.2 TOEIC Bridge®受験について

今年度は Velc Test に加え、学生達は新 TOEIC Bridge® パイロット受験（無料）の機会にも恵まれた。学生達の勉強意欲が高まっている 4 月に試験を実施すること、客観的な試験結果が学生の手元に届くこと等、プラス面が多いだろうという期待のもと、学生に受験してもらうことを決定した。TOEIC Bridge®は、試験時間が 60 分間で、Velc Test と同様にマークシート方式の Listening Part と Reading Part からなる試験である。出題される題材は、TOEIC® Listening & Reading（試験時間 120 分間）において扱われる題材に比べ、より日常的なものに焦点が当てられている。進学・就職・職場での昇進のためによく利用されている TOEIC® Listening & Reading は、出題される話題がビジネスを中心としているため、特に高校を卒業して間もない低学年の学生にとっては、少々難しいと考えられる。したがって、TOEIC Bridge®対策を低学年次に行い、徐々に TOEIC® Listening & Reading 受験に耐え得る力をつける学びを進めて行く大学もある。3 章で提示する表 10~15 を見る限り、工学部学生には、TOEIC Bridge®レベルのテストで高得点を目指せるように指導していくことが適切であるように思える。

2. Velc Test（プレイメントテスト）実施結果

工学部（学科別）と薬学部それぞれの 1 年生と 2 年生の成績と併せ、留学生と再履修生の成績を以下にまとめる。表 1~3 の試験、また、表 4~9 の試験は、それぞれ同一問題を利用した。つまり、それぞれの実施時期において、同一問題に挑戦した結果を比較できるということを意味している。

表 1 より、学科間の得点差はさほど大きくないこと

表 1 2019 年 4 月実施 工学部 1 年生 VelcTest(留学生含む)

	平均点	最高点	最低点
工学部 1 年生	463.89	661	324
機械(68 名)	465.06	573	345
電気(65 名)	459.72	548	330
応化(88 名)	465.95	661	324

※ 2 か所の網掛け部分は、留学生の得点

表 2 2019 年 4 月実施 工学部 1 年生留学生 Velc Test

	平均点	最高点	最低点
1 年留学生(5 名)	523.80	661	462

1 年生留学生(5 名)：中国(2)、韓国(3)

表 3 2019 年 4 月実施 薬学部 1 年生 VelcTest

	平均点	最高点	最低点
薬学部 1 年生	578.74	725	422
A クラス(48 名)	631.04	725	596
B クラス(49 名)	579.27	596	569
C クラス(48 名)	525.92	569	422

が分かる。また、表 1 と 2 を比べることにより、工学部留学生の能力は、同一学部・学科において、かなり高いことが明らかになった。一方、薬学部に目を移すと、表 3 より、各クラス間の得点差は 50 点以上開いていることが分かった。入試に英語の学力試験が課されている(薬学部)か、いない(工学部)かという違いがあるため、学部間の得点に開きが生じることは、ある程度予想された。表 1 と 3 より、実際に学部間の得点差は約 115 点あり、非常に大きいことが分かる。

次に、表 4 と 5 を比較することにより、工学部では、低学年の方が高学年よりも得点が高いことが明らかになった。以前の成績と比較すべく、表 1 と 4 を眺めると、学科間の得点差が大きくなったことも判明した。また、平均点を見る限り、4 月から学期末の成長は微増にとどまり、大きな変化はなかった。

表 8 と 9 を比較すると、工学部と同様に薬学部も、高学年よりも低学年の平均点の方が高いことが分かった。以前の成績との比較のために、表 3 と 8 を眺めると、4 月から学期末にかけて、約 27 点の平均点上昇があり、成長が認められた。依然としてクラス間の得点差は大

きいが、4 月実施時よりも約 26 点縮まったところもあった。

表 1 と 2 と 4 と 5 と 6 によると、留学生は工学部の中では最上位の平均点を示すことがわかる。英語の成績は学内トップクラスの者が多い。4 月から学期末への成績推移に関しては、特に 1 年生の留学生の成長が大きく、およそ 48 点得点を伸ばしている。

表 7 より、再履修生は平均点が群を抜いて低いことが分かる。再履修者のパターンとして、「実力があるにもかかわらず、出席状況が悪いため単位が取れない者」と「実力に不足があるため単位が取れない者」の 2 つのケースがある。後者のタイプの学生は、延々と単位を修得できない可能性も大いに有り得る。高校卒業時まで身に付けておくべき英語運用能力を有していない可能性があるため、通常の授業クラスとは別の、リメディアル的なクラス編成を行う必要があると考える。

表 4 2019 年前期末実施 工学部 1 年生 VelcTest(留学生含む)

	平均点	最高点	最低点
工学部 1 年生	466.19	659	298
機械(65 名)	464.89	610	331
電気(65 名)	455.42	580	298
応化(86 名)	475.31	659	345

表 5 2019 年前期末実施 工学部 2 年生 VelcTest(留学生含む)

	平均点	最高点	最低点
工学部 2 年生	456.25	639	315
機械(55 名)	449.73	558	315
電気(55 名)	444.84	615	340
応化(72 名)	469.94	639	331

表 6 2019 年前期末実施 工学部留学生 VelcTest

	平均点	最高点	最低点
1 年と 2 年留学生	516.88	633	423
1 年生(4 名)	571.75	633	511
2 年生(3 名)	462.00	511	423

1 年生留学生(4 名)：中国(1)、韓国(3) 2 年生留学生(3 名)：中国(2)、ベトナム(1)

表 7 2019 年前期末実施 工学部再履修生 VelcTest

	平均点	最高点	最低点
全再履修生	385.57	500	304
機械(11 名)	388.09	500	315
電気(9 名)	378.67	471	304
応化(10 名)	389.00	471	336

表 8 2019 年前期末実施 薬学部 1 年生 VelcTest

	平均点	最高点	最低点
薬学部 1 年生	605.37	737	434
A クラス(48 名)	644.13	737	526
B クラス(49 名)	618.27	691	529
C クラス(47 名)	552.34	639	434

表 9 2019 年前期末実施 薬学部 2 年生 VelcTest

	平均点	最高点	最低点
薬学部 2 年生	593.65	817	442
A クラス(31 名)	664.39	817	518
B クラス(38 名)	586.24	652	511
C クラス(29 名)	527.76	610	442

3. TOEIC Bridge®実施結果

前章「2. Velc Test 実施結果」と同様、異学年・異学部・異学科、並びに留学生・再履修生の TOEIC Bridge® 成績を以下に示す。表 10～15 は、同一問題を用いて実施したテストの結果である。

表 10 と 11 の比較、表 14 と 15 の比較をそれぞれ行くと、工学部・薬学部ともに低学年の平均点が高学年のものより若干高い。Velc Test 成績においても、同様の結果が現れたことは、前章で観察した通りである。学習年数の長い高学年の能力の方が高くあって欲しいと希望するが、実際は叶わなかった。また、表 10～12 の比較により、工学部において、留学生の英語力は非留学生よりも随分高いことが分かる。更に、表 12 と 14 と 15 で平均点だけを比べると、1 年生留学生

の平均点は、薬学部 1・2 年生それぞれの学年平均よりも高いことが判明した。

表 10 と 11 と 13 の比較により、工学部各学科間の平均点の差異はそれほど大きくないことが分かる。同時期に実施した Velc Test の成績を示した表 1 でも、同様のことを示している。一方、再履修学生の英語力は、非再履修生のものと大きな差があることが明らかとなった。表 13 を眺めてみると、かなりの割合の再履修生が、英語力をあまり有していないと考えられる。したがって、再履修を次年度以降も再び繰り返す可能性も大いにあり得ることが予想される。

表 14 と 15 より、直ぐ上位のクラスとの得点差は、低学年が平均約 6.0 点、高学年が平均約 8.5 点であり、僅かながら低学年の方が小さいと言える。

表 10 2019 年 4 月実施 工学部 1 年生 TOEIC Bridge® (留学生含む)

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
工学部 1 年生	56.24	23.79	32.45	96	30
機械(68 名)	57.40	24.97	32.43	91	31
電気(66 名)	53.64	22.44	31.20	91	31
応化(87 名)	57.30	23.89	33.41	96	31

※ 3 か所の網掛け部分は、留学生の得点

表 11 2019 年 4 月実施 工学部 2 年生 TOEIC Bridge® (留学生含む)

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
工学部 2 年生	56.23	24.21	32.02	97	30
機械(63 名)	56.00	24.68	31.32	97	30
電気(60 名)	52.98	22.65	30.33	84	30
応化(72 名)	59.13	25.08	34.04	86	31

※ 網掛け部分は、留学生の得点

表 12 2019 年 4 月実施 工学部留学生 TOEIC Bridge®

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
1 年と 2 年留学生	76.75	35.25	41.50	96	52
1 年生(5 名)	82.60	39.00	43.60	96	73
2 年生(3 名)	67.00	29.00	38.00	86	52

1 年生留学生(5 名) : 中国(2)、韓国(3) 2 年生留学生(3 名) : 中国(2)、ベトナム(1)

表 13 2019 年 4 月実施 工学部 再履修生 TOEIC Bridge®

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
全再履修生	42.96	19.50	23.46	71	30
機械(8 名)	41.25	19.00	22.25	50	30
電気(10 名)	42.30	19.10	23.20	71	30
応化(10 名)	45.00	20.30	24.70	70	36

表 14 2019 年 4 月実施 薬学部 1 年生 TOEIC Bridge®

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
薬学部 1 年生	80.74	34.31	46.43	98	40
A クラス(48 名)	86.23	37.67	48.56	97	65
B クラス(48 名)	81.73	34.71	47.02	98	49
C クラス(48 名)	74.25	30.54	43.71	93	40

表 15 2019 年 4 月実施 薬学部 2 年生 TOEIC Bridge®

	平均点	Listening 平均点	Reading 平均点	最高点	最低点
薬学部 2 年生	80.63	34.75	45.88	100	53
A クラス(36 名)	88.83	40.42	48.42	100	74
B クラス(39 名)	81.33	34.90	46.44	91	53
C クラス(37 名)	71.89	29.08	42.81	87	53

4. まとめ

必修の Reading 系科目のクラス編成を能力別にして、今年で 2 年目を迎える。しかしながら、同一クラス内においても依然として実力にかなりの差が存在する。クラス別の成績結果をまとめた薬学部の表 3 と 8 と 9 と 14 と 15 において、各クラスの最高点と最低点を眺めると、能力差の大きさが一目瞭然である。プレイメントテストの得点を基に能力別に分けたとしても、ほぼ同程度の実力を持ち合わせた学生群のクラス

を形成することは難しいようである。また、上位クラスと下位クラスの差も大いにある。原因は、入試形態の違いにまでさかのぼると考えられるが、各担当教員には、入学した学生達の力をいかに伸ばすかということが求められているはずである。データの蓄積が始まったばかりの状態ではあるが、学生に、よりよい学びを提供することができるよう、現状をしっかりと把握し、そこから見えてくるものを活用し次へと繋げたいと考える。

担当教員数の少なさをはじめ、処々の問題を抱えた

限られた学習環境の下ではあるが、表 1 と 4、2 と 6、3 と 8 をそれぞれ比べてみると、割合の大小にかかわらず、得点の伸びが認められた。現状は、“学生が学習内容を理解しているかどうかに配慮した授業を行うこと・シラバス通りに学習を進めること・出欠席の管理を徹底すること”を念頭に置いて授業を行っているのみの状態である。今後は、更に、成長の要因・成長の大小差異の原因を突き止めることも課題となるであろう。

留学生達の受験結果をまとめた表 2 と 6 と 12 と、これらの表に対応する工学部学生の成績を比べてみると、留学生達の英語力が高いことは明らかである。彼らは母国語に加え、日本語能力も身につけており、語学学習に長けた学生といえる。もともと日本で育った学生達にとって、学習の動機づけや刺激となり得るであろうから、時には留学生達を巻き込んで、授業設計することもよいかもしれない。一つの案として提案したい。この大学を選び、はるばる海外から入学してくれた学生に、満足してもらえる学習を提供する必要があることは確かである。その結果として得られた学びは、留学生にとって良い財産になるのではないかと考える。

一方、表 7 と 13 から見て取れるように、再履修生の問題は深刻である。満足に値する学習を提供する対象は、留学生のみではない。当然、再履修生に対してもケアは不可欠である。英語に対する苦手意識、学習意欲の低下、自信の喪失等の問題を既に抱えていると考えられるため、効果的に学習を進めて行くための解決策を見出すことは、かなりの難題である。

今後も継続して Velc Test を利用し、成績の推移を眺めていく予定である。実施回を重ねるごとに、より多くの角度から結果を眺めていくことが可能になる。蓄積しているデータは僅かであるが、これらを眺めることにより、今までよりも問題意識をもって授業に臨めるようになったという変化も体験している。測定した結果から明らかになったことを分析し、日々の授業改善に役立てたいと考える。